



## ある画像から 交易の民—アイヌ

佐々木 利和 (ささき としかず)

北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授

1948年北海道に生まれる。東京国立博物館、文化庁、国立民族学博物館を経て北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授。早稲田大学博士(文学)。

皆さまにひとつの画像をお見せいたします(図1)。さて、どういう人物を描いたものでしょうか。右上に「宗耶酋長／長剣肖像」との画題がありますから、これで人物が判明します。画題を読んでみましょうか。まず「酋長」と「肖像」はわかりますね。で、最初の「宗耶」ですが、これは北海道の地名ですといえば、どうでしょうか。ソウヤと読めますね。そう、今の稚内市の宗谷です。そして「肖像」の前の二文字はチョウケンと読んでください。

この画題は「ソウヤ酋長チョウケン肖像」となります。チョウケンはこの男性の名前になります。え？背中に長い刀を負っているからそれを指して長剣というのではないか、ですって。なるほど、面白い発想ですね。「長剣(を背負った)ソウヤの酋長の肖像」となりますか？

でも、チョウケンはやはり人名なのです。というのは平秩東作さんが天明四(1784)年に著した『東遊記』という書物の中に次のような一節があります。すなわち「ソウヤのチャウケンといふ者は髭うるわしく…」と。これでチョウケンが人名であることが確定します。平秩さんは続けてチョウケンの特徴について触れます。「…その(髭の)長さ七間有りしもの七、八茎もありし、其外も五間ほどはありしといふ、奇相なり、領主えも二、三茎を献じたり、今に持伝へ給ふといふ、寿は百歳近くまでいきたり、今にチャウケンが像とて絵にかき、上に贅など題したる掛物あり…」と。

「ソウヤのチャウケン(チョウケンのこと)というものは、髭が美しく、とても長い。その長さは七間(およそ12mにもなりましょうか)もあるものが七、八本。そのほかのものも五間(およそ10mでしょう)ほどはあるといえます。変わった容貌(ようぼう)でしょう。この髭を領主(松前侯?)にも献上し、侯は今もお持ちであるということです。百歳近くまで生きていたといえます。このチョウケンを描いた掛軸が今に伝わり、その絵の上のほうには画贅(えづい)あります…」

平秩さんがいうチョウケンの画像とここでご覧に入れている画像とは別物だろうと思います。いくつかの

絵になるような、つまりはそれほど有名な存在だったので。

ところで平秩さんだけの記録ではちょっと、とおっしゃる方がいらっしゃるかもしれません。別の記録ではどうなんだい？ということでしょう。平秩さんよりも少し前にこんな記事があります。串原正峯<sup>くしはらせいほう</sup>さんが寛政四（1792）年に著した『夷言俗話<sup>いげんぞくわ</sup>』に「チョウケンが事」というのがあります。

「…宗谷場所の内にトンベツといふ所あり、此所に先年チョウケンといふ夷ありしが、髭の長さ五、六尺有て地を引しとなり、今年宗谷会所へも度々来りしが、イタクマヨクといふ乙名はチョウケンが子なり、シリメキシユは孫にて、テケバセは彦なり、ルゝモツへのコタンヒルといふ乙名もチョウケンが孫なり、髭の事を夷言レキといふなり」と、このように家族関係までもしるされています。ちょっと読んでみますか。「宗谷場所のなかにトンベツ（浜頓別、中頓別のあたりでしょうか）というところがあります。そこに先年、チョウケンというアイヌがいました。この人の髭の長さが五、六尺（おおよそ1.5~1.8mほど）もあって、（歩くときは髭が）地をひきずっていますよ。今年（今年）は宗谷会所（場所請負人や詰めあい役人の事務所）にたびたびやってきてましたよ。宗谷場所の乙名（役蝦夷の長）のイタクマオクはチョウケンの子だし、シリメキシユは孫、テケバセはひ孫ですよ。

またルルモツペ（留萌）の乙名コタンピルもチョウ

ケンの孫ですよ。髭のことはアイヌ語ではレキといいます」。どうですか、串原さんの記録だと髭の長さがやや妥当になってきましたね。それにしても、チョウケンの子や孫、ひ孫はみんなこの地方の有名人なのです。華麗な家系だったのですね。

## 二

さて、この絵をすこし詳しく見ていきましょうか。

眼光するどく、白髪<sup>しろかみ</sup>の混じった髪やひげ。右手を見てください。髭のはしが巻き付けられています。いかに長い髭であるかがよくわかります。チョウケンは歩くときなどはこの髭を袋に入れて首からつるすのだそうです。

彼は薄い緑色の地の衣服を着ています。裾には波の文様が、衣服全体には龍を中心に花柄などの文様が施されています。これは俗に蝦夷錦、または山旦服（さんたんふく）などと呼ばれている中国（清朝）の官服（皇帝以下臣下が正式の場で着る衣服で、身分によって地の色や文様が異なります）の一種です。絹地<sup>しゅう</sup>で刺繍が施された美しいものです。余談になりますが、この龍文の衣服は、正式なものは琉球王国にもたらされていますし、長崎からも入っているようです。しかし、蝦夷錦や山旦服といわれるものは、中国から黒龍江下流域を経て、樺太そして蝦夷地にもたらされたものみの名称です。ですから極めて貴重なものをチョウケンは身にまとっているのです。



図1 宗耶酋長／長剣肖像『蠢動変態』（シーボルトコレクション）

背には長剣を背負っています。柄の感じからすると日本刀のようでもあります。18世紀も中頃になると、アイヌのおさたちは自らが作ったエムシという飾り太刀を肩から吊るすように身にまといまいます。それ以前では太刀を背負っている絵が残っていますから、あるいは古い形態を守っているのかもしれませんが。アイヌの使用しているエムシは形こそ日本刀ですけれども、儀礼のための道具であって、武器ではありません。そもそも刀身には焼きがはいっていないなまくらか、竹光なのです。この長剣はどうなのでしょう？絵からだけでは判断がつかえませんね。

頭には妙な帽子のようなものをかぶっています。これはどうやらイナウ・カサといわれているもののようです。イナウ・カサというのは、イナウ（宗教儀礼に用いる重要な祭具で、ふつうヤナギやミズキなど肌の白い木で作る削りかけのことです）の一種であるキケ（削った部分だけ）をよ撫ってつなぎ、長いひも状にし



図2 イナウ・カサ（ベルリン国立民族学博物館）



図3 莊吉發『謝遂<職貢図>満文図説校注』國立故宮博物院、1989

たものを、巻き上げ技法で編み上げていきます。そして帽子状に成形したものなのです。伝承例が極めて少なく、日本では北海道大学に一例があります。外国では数例が確認されています（図2）。

中国・清代にまとめられた『職貢図』には樺太アイヌのイナウ・カサが現存のものと同じような形できちんと描かれています（図3）が、チョウケンのもとは形態を異にします。あるいは樺太例と蝦夷地例との違いなのかもしれませんね。

イナウ・カサをかぶっている画例はほかにもありますから、樺太やソウヤでは案外身近な存在だったのでしょうか。

### 三

チョウケンの左手のほうには、二つの漆器が置かれています。これは両方とも日本製ですが、アイヌ文化のなかでは宗教儀礼に欠くことのできない大事な道具類です。左奥の黒漆の容器ですが、これは日本文化の中では貝桶（貝合わせの道具である絵が描かれた貝を入れる容器）とか鬘桶とかいわれる容器で、俗に行器ともいわれています。アイヌ文化の中ではイオマンテなどの宗教儀礼をおこなう際に、神に捧げる酒を醸す容器であり、また儀礼を執行する際の酒を容れる容器でもあるシントコです。シントコはおおむねこの形で金蒔絵の文様があったりしますが、黒漆の四脚が主です。

シントコの前には朱漆の天目台に載せられた外黒内朱の椀があり、その上にへら篋状のものが横たえられています。

これも宗教儀礼で重要な役割を果たすトゥキといわれているものです。神に捧げる酒を容れるものです。アイヌ文化では天目台（タカイサラ）の上に木椀（トゥキ）を載せますが、これはアイヌ独特の方法です。日本文化や、中国文化では天目台の上に乗せるものは金属製の碗か陶磁器の碗に限られます。なぜアイヌ文化は漆器にこだわったのでしょうか？

トゥキの上に横たえられている篋状のもの。これは

皆さんご存知のイクパスイという祭具です。30cmくらいの長さで、幅が3cmくらい。厚さは最大1cmくらいでしょうか。表面には美しい彫刻が施され、中には漆を塗ったものもあります。アイヌ工芸を代表するものとして、高い評価がなされています。本来は宗教儀礼の際に神に酒を捧げる重要な祭具です。トゥキに注がれた酒の中にイクパスイの先端を浸し、そこから落ちる一滴一滴が神の国には大量の酒となって届くといいますし、人間の発した祈り言葉の行き届かない部分を神にお伝えしてくれるという重要な役割も負っています。

そしてチョウケン<sup>カ</sup>はクマに寄りかかっています。みてこのクマは毛皮ではなく生きていてそのようです。チョウケンになついているのでしょうか。アイヌに対する絵師のイメージなのでしょう。

さて、このチョウケンの画像からどんなことをお感じになりましたか。異貌ともいえるチョウケンですが、ソウヤという地にあつて（詳しくはトンベツなのですが）よくみるアイヌのすがたではありません。着ているものも、使用している容器もアイヌ自らが作り出したものではありません。そう、すべて交易によって得たものなのです。

アイヌ文化は、というすべてが狩猟・漁労など自然に依拠した生活と考えがちですが、樺太や黒龍江下流域のさまざまな人びととの交流があつたりしていたのです。和人との関係はまたちょっと別ですけれども。

#### 四

画像についての説明ばかりが先にいって、肝心なことをわすれていました。この画像の資料データです。

この画像は『蠢動変態』と扉に記された絵巻物のなかに収められています。扉の題は新山質、漢文の文字は鳳嶽山、絵師は飯塚圓貞広美と奥書に記されています。あまり聞いたことのない人たちですが、新山質は『蝦夷風土記』の著者、葛西因是と同一人物ですというと、ああ、江戸時代の漢学者の、とうなずかれる方もいらしゃるでしょう。年紀に「壬子」とありますから、葛西因是の活躍した時期から考えると寛政四

(1792)年とみるのが妥当です。となると申原さんの記録した時期と同じとなりますね。

『蠢動変態』とはまたかなりひどい題をつけたものですね。「蠢動」といいますのは、漢和辞書によりますと「①虫がうごめくこと②無知で騒ぎ立てること」とありますし、「変態」は「変わったさま」とあります。和人から見て無知な人びとがやがて変わっていくというような意味を含んでいるのでしょうか、あまりうれしくない題ではあります。

しかし、この絵巻の内容はアイヌの文化や歴史を考えるうえでかなり価値の高い内容をもっていることはチョウケンの画像を見てもおわかりでしょう。ところで、この絵巻に解説されたチョウケンに触れるのを忘れるところでした。チョウケンの画像のあとに漢文で「蝦夷中之魁偉莫出長劍右者／宗耶與加羅登相接／北珠、女直錦、皆其所多有／故被服、裝飾之美殊過它夷／其須長過膝、坐即手□之」と記されます。読んでみましょうか。

「蝦夷中の魁偉はチョウケン<sup>かい</sup>の右に出る者なし、宗耶と加羅登はあい接し、北からの珠や女直の錦は皆、その所に多くある、故に、被服や裝飾の美なること他夷に過ぐ、その鬚の長さこと、膝を過ぎ、坐すればすなわち、これを手□とす」読めない文字がひとつありますが、「蝦夷の中でからだがおおきくて立派なのはチョウケン<sup>か</sup>の右に出るものはありません。ソウヤと加羅登<sup>らふと</sup>は相接して、北からの珠（首飾りなどに使うトンボ玉など）や女直の錦（蝦夷錦）はみんなソウヤに多くあります。だから衣服や裝飾の華美なることはほかの地域の蝦夷をしのいでいる。チョウケン<sup>か</sup>の鬚の長さは膝を過ぎるほどで、座っているときは手にそれを巻き付けています」と書いています。鬚の長さはここでようやく正されたのでしょうか。

この絵巻は縦が30cmほどで紙本著色（和紙に彩色した絵の描き方）。残念ながら、日本にはなく、オランダのライデンにあるシーボルトコレクションの一です。

いずれ象徴空間にできる国立のアイヌ文化博物館（仮称）で展示できたらいいなあと思います。